様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　 ６ 月 １２ 日現在

機関番号：３２６４４
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｋ０３００４

研究課題名（和文）日魯･日蘭文化交流史研究の新展開に向けた稲垣家旧蔵地理学関連史料の全容解明

研究課題名（英文）A study on the significance of source materials related to geography in Inagaki Collection. Toward a new development in the history of Japanese cultural exchanges with Russia, and the Netherlands.

研究代表者
吉田　厚子（YOSHIDA, ATSUKO）

東海大学・現代教養センター・教授

研究者番号：５０４０８０６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、江戸時代の文化遺産「稲垣家旧蔵地理学関連史料」に着目して、その全容及び史料性を解明する作業と、同史料のデジタル化に向けた作業を進めた。その結果、第一に、「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の抽出とそれら個々の史料の解説を公表するための整備がなされた。第二に、同史料の地図･地球儀等器物史料の一部ではあるが、デジタル公開化に向けた基盤が形成された。第三に、上記研究作業の過程で、19 世紀前半の知識人が天文･地理的情報を収集した結果、当時の世界情勢をいかに理解したのかが明らかになり、その意義を日魯・日蘭文化交流史の視点から位置づけた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究で着目した「稲垣家旧蔵地理学関連史料」は、江戸期の貴重な文化遺産でありながら、従来は殆ど顧みられることがなく、また利用もされてこなかった。これら史料の全容や個別史料の特徴が見えてきたことには学術的意義を見出せる。また同史料群の目録化･デジタル化の基盤形成は、国内外の関連研究者のために史料の新たな有効活用の道筋を開くことにもなった。
　なお本研究の成果は、江戸時代の日蘭･日魯文化交流に関わる史的研究の成果であるが、我が国と両国との長年にわたる学術的･文化的･人的交流の実態を跡づける成果となるので、両国との学術交流は勿論、民間レベルの文化交流にも資するという社会的意義を有している。

研究成果の概要（英文）：Focusing on source materials related to geography in Inagaki Collection, this study has taken a step for the analysis of their whole picture and characteristic and for the visualization of historical objects:
 Firstly, geographical source materials have been sorted out and collected from the whole Inagaki collection and preliminary commentaries on some of them have been prepared.Secondly, judging from the importance of objects for historical researches, preparatory works have been done for the visualization of some objects in Inagaki Collection, specifically world-maps and globes.Thirdly, this study reveals how those intellectuals in the first half of the nineteenth century recognized the international state of affairs, based on their acquisition of geographical as well as astronomical data, and clarifies the significance of their understanding from the viewpoint of the history of cultural exchanges between Japan and Russia, and between Japan and the Netherlands as well.

研究分野：日蘭･日魯文化交流史

キーワード：日本史　文化交流史　江戸時代　日魯・日蘭　地理学　洋学史　稲垣定穀　古地図学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 19 世紀前半ともなると、我が国の知識人は、オランダ語を自ら習得し、オランダ語で記された書物(以下蘭書と略記)の読解・翻訳作業を通じて、新たな北方及び世界の地理的情報を直接獲得するようになっていた。また彼等の中には、舶載されたオランダを中心とする西洋で製作された地図・地球儀を模写・謄写したり、自ら製作したりする者も出現した。一方当該期には、ロシア使節やロシアからの帰還漂流民によって将来された地図・天球儀・地球儀に注目し模写する知識人たちも現れた。かかる知識人の中には、蘭学者の大槻玄沢や、大坂商人の間重富、伊勢商人の稲垣定穀(1764 年～1835 年)などが含まれていた。江戸時代の対外関係というと、とかくペリー来航に注目が行きがちであるが、その約半世紀前のロシアとの交渉は、外交あるいは対外認識の基本例となったという点で重要である。ところが、19 世紀前半に生起した、ロシア・オランダからの海外情報受容という新局面を担った知識人に着目して、彼等がどのような北方に関する地理的情報を集め、如何なる分析をしたのか、それがどのように活用されたのか等については、従来は殆ど明らかにされてこなかった。その要因としては、当該期の知識人が蒐集した地理学関連史料の多くが、未公開かつ未整理の状態で、それらの全容や個別史料の性質が判然としていなかった点が考えられる。従って、貴重な文化遺産である稲垣家旧蔵(津市教育委員会及び津市図書館)の北辺図・世界図及び地球儀や関連文献に焦点を絞り、その全容や個々の史料性を徹底的に調査・分析して解明・公開することは、19 世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態を浮彫にしていく上でも、そして日魯・日蘭文化交流史の意義を再認識するための基盤形成の上でも極めて意義がある。

(2) 但し、従来の我が国の関連研究を回顧してみると、地図史の観点からは、秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』があるが、通史的叙述に止まり、当時を代表する北方研究者、大槻玄沢については、本書の中ではただ一箇所で言及されるのみである。同じく北方研究者の間重富についても、伊能忠敬の節で、天文方との関連で一度触れられるにすぎない。また、海野一隆の一連の研究を集約した『東西地図文化交渉史研究』は、地図学の権威としてさすがに手堅く、教えられるところも多いが、北方問題へ対処するための地理的情報という観点からの分析はない。一方、蘭書におけるロシア記事の内容検討に至っては、殆ど着手されていない。蘭書とその翻訳書に関するリストは、例えば、開国百年記念文化事業会編『鎖国時代 日本人の海外知識－世界地理・西洋史に関する文献解題－』に所収されているが、各書の内容として、具体的に何が書かれているのかについての詳細は、同書からは全く得られない。加えて、稀覯史料と明らかに位置づけられ、日魯・日蘭文化交流史研究における新局面開拓に不可欠な、伊勢商人稲垣定穀が蒐集ないしは作製した北辺図及び世界図、地球儀、測量器具、版木、書籍、彼自身の研究著作についての具体的な調査は、研究代表者と研究協力者が着手するまでは、全く進行していなかった。なお、海外の関連研究については、地図等の書誌学的研究はあるものの、文化交流史的視点から分析したものは、管見の限り皆無である。

(3) 研究代表者は、これまで「科学研究費」による「地図・地球儀の分析を主とした江戸時代における北方に関する地理的情報集積過程の研究」（平成 19～21 年度：基盤研究（C））、及び「稲垣家旧蔵地図・地球儀の解析を主とした江戸後期の世界地図編纂事業究明に向けた研究」（平成 23～25 年度：基盤研究（C））を推進してきた。それら一連の研究で明らかになったのは、江戸店をもつ伊勢商人稲垣定穀は、①京都では天文学を橘南谿に、暦術算数を小島好謙に師事し、江戸では本田利明・本田芳信と交わって天文地理学に精通し、出身地伊勢国などの実地調査・測量を自ら行い、各地の多数の地図を作成した洋学史上の重要人物であったこと、②研究の一環として、大槻玄沢周辺に存在し利用されていた地図・史料で、現在不明とされてきた史料を記録に留めていたことであった。従って、江戸時代における知識人の地理的情報集積過程や世界地図編纂事業の実態解明のためには、関係する貴重史料を多数含む「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の全容と個々の史料の特質を究明することが不可欠となったのである。この課題については、特に後者の「科学研究費」によって実施した所蔵先での悉皆調査を通じ、研究がかなり進み、「稲垣家旧蔵地理学関連史料仮目録」の作成や一部史料のデジタル化に着手するに至った。しかし、公表に向けた史料目録の編纂や史料画像のデジタル化を視野に入れた個々の史料の特質の解明については、いまだに不充分な現状にある。そこでかかる研究の継続と更なる進展をはかるために、標題の研究計画を着想するに至った。

２．研究の目的

(1) 本研究は、江戸時代の貴重な文化遺産「稲垣家旧蔵地理学関連史料」に着目し、その全容及び史料性の解明とそれらのデジタル化を主たる目的とする。

(2) 上記(1)の成果に基づき、19 世紀前半の知識人が、日本の北方(北辺・ロシア)に関する地理的情報収集の結果、理解した世界情勢の実態を、日魯・日蘭文化交流史の視点から把握し、その情報内容の意義を、文献のみならず製作された地図・地球儀などの器物の分析を通じて解明することを目指す。

(3)この研究により、従来比較的知られていない同史料の有効活用の機会が提供されるとともに、

19 世紀前半における海外情報受容の知識系統が明らかにされ、当時の知識人の情報ルート解明に貢献できるようにする。

(4) 上記(3)に関してより具体的には、これまでの自身の研究では不充分であった、「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の調査・整理を更に進展させ、他の関連史料と比較しながら、個別史料の特質を解析する。その成果により、『稲垣家旧蔵地理学関連史料目録』を作成・公表するとともに、地図・地球儀等図像・器物史料のデジタル化をはかり、一般の利用に供するようつとめる。その結果、19 世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態の解明に向けた研究基盤の形成と、当時知識人たちの情報ルートの解明や世界地図作成史研究、更には日魯・日蘭文化交流史研究における新局面の開拓に貢献できるように展開させる。

３．研究の方法

(1) 研究方法の概要

「稲垣家旧蔵地理学関連史料」を一般の利用に供するために、津市図書館等での関連史料の悉皆調査を行い、蒐集・撮影作業と目録・デジタル化に向けた分類・整理作業を進めて、『稲垣家旧蔵地理学関連目録』の公表と史料画像の作成を目指す。また地図等の解析に要する蘭書との対比やオランダ側の事情の分析、天文学やオランダ語・ロシア語に関する専門的知識を有する専門家を含めた研究体制を構築し、同史料の解析作業を進展させて個々の史料的特質の解明を期す。それらの成果に基づき、19 世紀前半における海外情報受容の知識系統の把握や当時の知識人たちの情報ルート解明につとめ、日魯・日蘭文化交流史研究における新局面の開拓を目指す。

(2) 具体的な研究の方法

① 「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の全容を解明すべく、研究代表者と研究協力者の双方は、津市教育委員会及び津市図書館で関連史料の悉皆調査を行い、同調査の完了を目指す。また併行して目録化に向けた分類・整理作業を遂行し、作成過程中の「稲垣家旧蔵地理学関連史料仮目録」を補完していく。
② 蒐集した「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の個々の史料的特質を解明するために、研究協力者から、地図・地球儀作成の基礎にある天文学やオランダ語・ロシア語に関する専門的知識の提供を受け、蘭書との対比やオランダ側の世界情勢に関する知識の分析を行う。
③ 「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の個別史料の特徴解明に向けた比較検討用の材料として、熊本大学図書館所蔵の永青文庫、明治大学図書館所蔵の蘆田文庫等をはじめ各地に点在する関連史料や、解析に必要な関連研究文献を国立国会図書館や、国内の各研究機関・図書館等で調査・蒐集する。その機会を利用して、成果構築に向けての研究打ち合わせを東京や地方で行う。
④ 地図・地球儀等の図像・器物史料については、デジタル化に向けた撮影・画像処理作業を進める。かかる作業に要する撮影機器類は、研究代表者が過去に受領した「科学研究費」により完備することができたので、それを利用してこの作業を行う。但し、専門的技術を要する大型地図等の撮影・画像処理に関しては、専門業者に委託する。
⑤ 19 世紀前半における海外情報受容の知識系統や北辺・世界地理研究の実態を明らかにするためには、「稲垣家旧蔵地理学関連史料」と蒐集済みの「大槻玄沢史料」とを関連づける必要もある。研究代表者は既に、大槻玄沢周辺に存在し利用されていた地図・史料で、現在不明とされてきたものが「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の中に存在することを発見しているので、それら史料を相互に比較検討し、蛮書和解御用の職にあった大槻玄沢の海外情報受容の知識系統を明らかにすることで、為政者の世界地図編纂事業の全容の一端を解明する。また稲垣が玄沢から得た情報を精査することにより、庶民層が得た海外情報・知識の内容を明らかにする。
⑥ オランダ経由で日本の為政者や知識人たちにもたらされたロシア知識等の全容を明らかにするために、オランダ側の世界情勢に関する知識の分析を行ったり、蘭書を利用して作成したことが特定できる史料との対比をしたりする。
⑦ 上記の①～④は着実かつ地道に研究作業を継続し、『稲垣家旧蔵地理学関連史料目録』の作成や地図・地球儀等図像・器物史料のデジタル化の実現を目指す。上記の⑤の作業も継続し、関連諸史料の解析作業を飛躍的に進展させる。得られた新知見を積極的に公表することにも重点を置き、当時の為政者及び知識人たちの海外情報の解明や世界地図作成史研究、日魯・日蘭文化交流史研究における新局面の開拓に寄与できるようにする。

４．研究成果

(1) 研究の主な成果

研究期間全体を通じて、江戸時代の文化遺産「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の全容及び史料性を解明するために、研究代表者と研究協力者は、津市図書館等で調査・蒐集した関連史料の分類・整理作業を継続し、新規購入した「洋学史関連図書」や国内各機関所蔵の研究文献を駆使して同史料の解析作業を進展させた。その結果、「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の抽出とそれら個々の史料の解説を公表するための整備がなされた。また、同史料の地図・地球儀等器物史料の一部ではあるが、デジタル公開化に向けた基盤が形成された。加えて、上記の一連の研究作業の過程で、19 世紀前半の知識人が地理的情報を収集した結果、当時の世界情勢をいかに理解したのかが明らかになり、その意義を日魯・日蘭文化交流史の視点に位置づけた。

研究代表者の吉田厚子は、蒐集済みの「稲垣家旧蔵地理学関連史料」と「大槻玄沢史料」とを比較を通じて、蛮書和解御用の職にあった大槻の海外情報受容の知識系統の解明を試みた。かかる成果は「大槻玄沢『環海異聞』の海路記・海路略図の研究」と題し論文化して公表する予定である。また江戸時代における海外情報受容の実態を窺える、化学史に関する用語四項目の解説文を『化学史事典』に公表した。加えて、「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の特徴解明に向けて、神戸市立博物館や香雪美術館等に出張し、関連学芸員と情報交換をするとともに、各機関所蔵関連史料との比較検討などを行った。

研究協力者の吉田忠は、柴田収蔵と間重富の北方認識・関心の背景を探り、成果の一部を論文等で公にした。具体的には、柴田は佐渡出身で、佐渡時代から地図に興味を抱き、世界全図や蝦夷地図を収集・模写していた。江戸遊学後、蕃書調所絵図調書役に抜擢され、世界図「新訂坤輿略全図」と「蝦夷接壌図」を刊行し、北方への強い関心をもっていた。また間も本田利明「蝦夷大図」や蝦夷地、カラフト・千島列島図を集め、魯西亜新都ペテルブルグ之図を有し、ロシア・北方への並々ならぬ関心を示していた。柴田が伊東玄朴塾で蘭学の修業をする間に調所頭取の古賀謹一郎の知遇を得、古賀の自邸をたびたび訪れ、古賀が収集した世界地図・地理書を借覧し、古賀とともに世界地理を研究したことを解明した。また、稲垣定穀がマッテオ・リッチ製作の世界地図「坤輿万国全図」を研究し、『坤輿全図説』（1802 年）を刊行したことにも注目して、その本文の稿本、凡例の稿本、試し刷り、跋文の試し刷り（書き込み訂正あり）に加え、同じ伊勢出身の橘南谿の序文の原稿などが稲垣文庫に現存し、完成までの過程をたどれる点に鑑みて、これら稿本類を同文庫で収集し、その内容の分析に取り組んだ。加えて、江戸時代知識人の地理情報ソースの解明にも従事した。具体的には、豊後日出藩の儒者帆足万里が著した『窮理通』に見える世界地理に関する記法や地名等に着目し、著者が参照した蘭書の分析を行った。また稲垣定穀が『坤輿全図説』作成に当たって参照した、亀山藩由良時敏が写した世界地図と「尾張藩本田氏本「安濃」郡浄明院二家所蔵」の世界地図に着目し、定穀がこれら二つの写本から何を学んだかの解明を期した。一方、天文書を中心とした調査から、当時の知識人の情報受容系統の解明を試み、以下の成果も得た。稲垣家コレクションは写本が多く、稲垣定穀は親族に頼んで写させてもいる。誰がいつ、どこで、誰の所蔵本を写したかは、目録からは窺い知ることはできないが、こうしたデータが記されている写本も少しくある。天文学関係に限ってみても、「二儀略説」は「寛政四年（中略）於京師橘家塾中書写之」とあり、「乾坤弁説」ではその二年後に南谿のコメントが写し採られている。南谿は同郷の縁からであろう。文化八年には「応安具注暦」を「小嶋氏請所蔵写」とある。土御門家の天文学者小嶋好謙からは他にも本人の著書「或問摘要」を書写している。天文書ではないが、山村才助「亜西亜諸島志」を本田利明の所蔵書から写し取っている。このように、定穀の交流ネットワークが、書写の記録から浮かび上がってきた。

(2) 得られた成果の国内外における位置づけとインパクト

本研究で着目した「稲垣家旧蔵地理学関連史料」は、江戸期の貴重な文化遺産でありながら、従来は殆ど顧みられることがなく、また利用もされてこなかった。これら史料の全容や個別史料の特徴が見えてきたことには、それ自体に独創性があり意義を見出せる。

また幕閣や高級官僚ではなく、一介の商人が獲得しえた対外知識の内容を分析することにより、庶民レベルにまで広まったその知識とは何か、またその情報ルートはどこから得られ、どこまで拡散・共有されていったか等、上層部ではなく、庶民層の海外知識受容の解明という新たな研究視角が開かれた。加えて文献史料だけではなく、地図・地球儀など器物史料も研究対象とすることにより、両者の相互関連など文献と器物の史料的取扱いという一つのパイロット・スタディーにもなった。

本研究は、主として「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の目録化・デジタル化を目指していたので、国内外の日本史はもとより洋学史・科学史研究等広範囲の研究者のために、新たな同史料の有効活用の道筋を開く成果を生んだと位置づけられる。

(3) 今後の展望

① 「稲垣家旧蔵地理学関連史料」の活用の便をはかるためには、本研究で構築された基盤的成果を広く公表していかねばならない。その実現のためには、同史料群の目録や個々の史料に関わる解説集の刊行、画像史料等のデジタル公開化の作業を継続していく必要がある。

② また本研究の成果をより多くの一般国民に発信するために、研究代表者が本研究期間中に情報交換をした博物館等の学芸員と連携し、博物館等での将来的な企画展の共催にも寄与していく。

③ なおここまでの一連の研究により、稲垣定穀や大槻玄沢の地理的情報集積過程はかなり判明したが、その実態が江戸知識人全体にどれだけ普遍できるのかはまた別問題である。そのため今後は、大槻玄沢をはじめ多くの蘭学者とも人的交流のあった司馬江漢に焦点を当て、その未知の作品「地球分図」の情報・史料源を探る研究にも着手していく。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計7件（うち査読付論文　5件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 吉田忠	４．巻 3
２．論文標題 舶載医学蘭書小考	５．発行年 2020年
３．雑誌名 講座 近代日本と漢学　漢学と医学	６．最初と最後の頁 97-116
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田忠	４．巻 12
２．論文標題 柴田収蔵の蘭学修業―『柴田収蔵日記』に見る伊東玄朴塾―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 佐賀大学地域学歴史文化研究センター研究紀要	６．最初と最後の頁 pp.17-30
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田厚子	４．巻 なし
２．論文標題 『厚生新編』	５．発行年 2017年
３．雑誌名 化学史事典	６．最初と最後の頁 p.244
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 吉田厚子	４．巻 なし
２．論文標題 薩摩ガラス	５．発行年 2017年
３．雑誌名 化学史事典	６．最初と最後の頁 p.276
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田厚子	4．巻 なし
2．論文標題 高島秋帆	5．発行年 2017年
3．雑誌名 化学史事典	6．最初と最後の頁 p.400
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田厚子	4．巻 なし
2．論文標題 馬場佐十郎	5．発行年 2017年
3．雑誌名 化学史事典	6．最初と最後の頁 p.530
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 吉田　忠	4．巻 24
2．論文標題 柴田収蔵の収書活動－『柴田収蔵日記』に出る蘭学関係書－	5．発行年 2017年
3．雑誌名 一滴	6．最初と最後の頁 pp.113-142
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計3件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 吉田忠
2．発表標題 蘭学東漸―杉田玄白・建部清庵・大槻玄沢―
3．学会等名 洋学史学会一関大会特別講演（招待講演）
4．発表年 2017年

１．発表者名 吉田　忠
２．発表標題 柴田収蔵と蘭学
３．学会等名 台東区立中央図書館主催：「『柴田収蔵日記』の世界」（招待講演）
４．発表年 2016年

１．発表者名 吉田　忠
２．発表標題 間重富とガリレオ
３．学会等名 大阪市立中央図書館主催：間家文書重要文化財指定記念講演会「間重富と科学－中国・ヨーロッパとの接点－」（招待講演）
４．発表年 2017年

〔図書〕　計2件

１．著者名 吉田忠	４．発行年 2020年
２．出版社 大分県教育委員会	５．総ページ数 507
３．書名 大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書　帆足万里』史料集第二巻、解題と校注	

１．著者名 吉田　忠	４．発行年 2019年
２．出版社 大分県教育委員会	５．総ページ数 298
３．書名 大分県立先哲史料館編『大分県先哲叢書　帆足万里』史料集第一巻、解題と注解	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究協力者	吉田　忠 (YOSHIDA TADASHI)		